

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

秋祭りが各地で當まれている。10月8日午後、往馬大社(生駒市袁分町)の境内は大勢の人でにぎわっていた。同社は生駒谷十七郷の氏神で、古くから「火燧木神」(火を燃りだす木の神)とされ、珍しい火取り行事(県指定無形民俗文化財)が行われる。氏子は南北に分かれ、競いながら秋祭りが進行する。

上手から奏楽の音が聞えてきた。神輿の渡御が始まつたようだ。キヨシツ（経室）坂を下り、しばらくすると行列の一行が境内に入ってきた。高張り提灯がすらりと並ぶ。マツリを差配するべ

ンズリという役が、南北に4人ずついる。その最上位のイットウベンズリが先導して、4基の神輿<sup>カミヨ</sup>が中央の石段上に立つ高座<sup>タカザ</sup>と呼ばれる御旅所に次々に納められる。人々が御供所から高座まで一列に並び、御供上げが始った。ヒノゴクをはじめ、餅・カマス・ザクロなどを次々に手送りする。今年は北が早く終った。



松明を担いで走る往馬大社の秋祭り。正面の建物が「高座」=生駒市で、筆者提供

## 往馬大社の火取り行事

の穂を束ねたものを4本突き刺した。これも今年は北が早かつた。

この後、少女たちが浪速神樂系の神樂を舞い、さらに白と黒の衣装を身につけた南北のベンズリが、「よいしょ、よいしょ」と声を掛けながら、袖を斜め左に振り下ろしたり、右に腰をひねる古くからの舞をする。

次がいよいよ火取り行事だ。1週間前に~~火~~薪火した火が、美しい芭<sup>ハチ</sup>般の火松明に点火される。火出し役が燃え盛る松明二つを同時に差し出す。火取

あつた。

(奈良民俗文化研究所代)